

「地域性とデザイン」

愛知産業大学
教授 杉田圭司



1. 岡崎の identity とデザイン

今日は地域性とデザインということで資料を作ってきました。「サイン計画」というふうに言いますとちょっとわかりにくいかもしれないけれども、たまたま今回岡崎市のサイン計画に関わったものですから、最初にそのお話をしようと思っていますが、私が実際仕事としてやっているのは、JR 西日本のサイン計画です。これは大阪の駅から、新潟、福岡までの 1,400 の駅のです。JR の駅の表示部分ですから時刻表から券売機から路線図、もちろん駅名看板も全てそうなんですけれども、まあ一つの駅で 50 ぐらいのいろんな標示物があるんです。その基本設計デザインをやりました。他にはホテルでは名古屋の東急ホテルのサイン計画をやりました。ホテルの外面の文字だとか、それをどういう材質を使ってやるかとかサイズ、まあそういうことも全部ひっくるめて地下の駐車場から最上階まで全ての文字表示に関わって、例えばルームナンバーからフロントの文字、それからレストランやショップの文字、素材と形、大きさ、そういうものを全てひっくるめてやるわけです。まあそんなようなことを仕事としてやっています。先ほど司会の水野先生からご紹介がありましたようにデザイナーとしてやっているものですからポスターをたくさんつくっています。世界 25 カ国ぐらいでしょうか、美術館にコレクションされています。基本的にはポスターというのはひとつの美術のジャンルというより、歴史を検証をするための一つの媒体として非常に手軽に集めることが出来るものですから、世界のいろんな美術館がポスターコレクションをしています。それに国際コンクールという形で作品を出しているものですから、そういう作品があちこちで入賞、入選しているので、そういう作品がコレクションされて残っているという状況があります。

ということで本題に入りたいと思います。一応今日資料でお配りしました「時代は Re 視点」についてお話をしたいと思います。これは 10 年ちょっと前に中部経済新聞で、「Re」について「Reverse」というテーマで「再生」という意味なんですけれども、これについて文章を書いてくれということで、「サイン計画」について書きました。これを読んでいただくと一番良くサイン計画というのはどういうものか分かると思うんですけれども、ちょっと簡単に読みますと、『村おこし』『街おこし』が今も盛んである。地方自治体の活性化の一端としての「サイン計画」の相談がここ数年多くなっている。街や村のアイデンティティを見直し、新しい魅力や可能性を捜し出し活力ある街への再生の中心的な役割を果たしている。』というふうに一度後でまた読んでいただくと良いと思うんですが、岡崎市もそういう意味で言うとまだサイン計画といってもですね、試行的に岡崎市と建設省、今は国土交通省ですけども、それから県と一緒に、東岡崎駅前から市役所、それから岡崎公園までのサインを作り直したという経緯があるんですね。後でまたお見せしますけれども。その時に、これは実際には東京の業者がやった仕事ですけども、僕は専門委員として参加したんですが、そこにどうい

うふうに岡崎市のアイデンティティを盛り込むかということが非常に大切になったということです。ここに書いてあるのは、サインというのは例えば美術館であれば美術館の入り口から中のどこに何があるのかというのを表示するための標識のデザインを計画することなんですけれども。岡崎市でいえば駅前から街全体の案内図、施設の案内、それから施設そのものの説明看板とか、方向・距離を示す表示物を誘導サインともいいますけれども、そういうのを全部ひっくるめて計画することがサイン計画なんです。それはひとつは街、例えば岡崎市でいえばですね岡崎市がどういう街かというのを基本的につくらないとサイン計画って出来ないんです。それはまた後でお話したいと思えますけれども。僕は今岡崎の街っていうのはよく解らないっていうか、本来は岡崎城を中心にした歴史的な街づくりが本来あるべきだと思うんですけれども、実際には岡崎城と岡崎公園だけが孤立しちゃって、その周辺に何も無いというのは、本来は岡崎市のアイデンティティをこれからつくる上で見直す必要があるんじゃないかなという気がしています。そういうことはただ単にサイン計画だけではなくて産業そのものも繋がってくるし、それから風土、それからいろんな街並みとか全部それが繋がってくるわけですよ。その辺が今後見直されないと、非常に中途半端な街になるのではないかなという気がいたします。この近県ですね、例えば静岡、それから岐阜、それから長野辺りのいろんな街並みを色々調査したことがあるんです。本当はまあそういうものの写真を見せながらお話するのが本当はいいのかなと思ったんですけれども、今回は大学とうちの学生を使って、地域にどういう形で関わっているかということを中心にお話をしたいと思います。

これは東岡崎の南口に設置してありますサインです。もう設置して7、8年ぐらいになるでしょうか。ここに専門委員として関わりました。柱というか脚の部分は岡崎の御影石を使っています。それから盤面の色はですね、岡崎の市の花である藤色をベースにしているんですね。もう一つは行燈というか、光が入るところもあるんですけれども、その部分に岡崎の桜と花を入れてあります。ベースは藤色というか、藤をイメージしたんです。この大きさも本来僕もあちこちのサインはたくさん見ているんですけれども、少し小ぶりになっていて本当はもうちょっと大きい方が見やすいかなというところもあるんですけれども、まあ近くに寄ってみればある程度細かい部分も分かるのではないかと考えました。それからあと耐久性の問題があって、こういう仕様になりました。これは本来岡崎市全域にこういうサインを設置するというのが基本なんですけれども。歩行者用のサインなんですけれども、とりあえず試作的に作ったというか、施工されました。これがその後全域に作られていないというのが非常に気にはなっているところなんですけれども、そういう形で設置をされたものです。これはアップのものですね。これは東岡崎の北口の方のサインです。これ殿橋のところの部分です。この遠景にですね、岡崎城が見えるんですけれども、手前のホテルだとか、マンションだとか、そういうものの中に隠れてですね、岡崎城がほとんど見えないということもちょっと気になったものですから写真で撮ったものです。これは岡崎城の北口の方でしょうか、設置されているサインです。今ざっと岡崎の現在使われているサインに関して少し僕が関わった部分でお話しました。本来サイン計画は、もうちょっと全域をやることもそうなんですけれども、もっと個々のいろんな問題がいっぱいあるんです。それはこの場合は出来なくて、と

りあえずそういう案内看板、誘導サインというふうにありますけれども、そういうものを設置するだけで終わっちゃったんですが、本来もうちょっとですね街並み全体をひっくるめた計画が本来されるべきであると思います。

2. 「岡崎未来城下町連合」のフラッグデザイン

これは私どもの学校の学生を使って、現在東岡崎の駅前から連尺、それから康生通り、伝馬通りに渡ってですね、フラッグデザインを商店街と協力して作りました。それについて今からお話をしたいと思います。これは東岡崎の駅前にある街路灯と合わせてフラッグを作ったんですね。今一部分真ん中辺にフラッグがありますが、これはうちの学生がやったものではないんですが、こういうふうずっと街並みにフラッグが作られています。これは今年の3月に打ち合わせをして、6月に学生に作らせてそれを今、順次掲示されているものです。ちょうど今、端境期というか、うちの学生がやったものではないんですが、それが展示されています。フラッグは一年間で6回変わるんですが、その中の5案をそれぞれの学生にデザインさせました。全員が3年生のデザイン学科のグラフィックデザインコース学生です。実はこの7、8年前からですね、うちの学生がずっとこの岡崎の商店街のフラッグには関わってまして、従来は自主的に学生の有志がデザインをしていたんですが、それだと不安定というか、どういう作品が出てくるか一回一回わからないということもあって、岡崎商工会議所が中に入っていて、商店街の方とお話しして、今年から一年間作ろうということで提案をさせていただいたわけです。これはこのサテライトでも作品を展示いたしました。ですから見ていただいた方もたくさんおみえになるかなと思うのですが、岡崎が地元の学生ばかりではないので、一応岡崎の話を私の方でしまして、それについて各学生が自分のイメージをフラッグにするとということを出させたものです。大体期間としては1ヶ月ぐらいかけてやったんですね。最終的に決まったものをデータにしてお渡しして、それを実際に染めてですね掲示するということが今進んでいます。じゃあここにどういうふうに岡崎のアイデンティティが付加されるのか、関わってくるのかということですが、学生はまだ20歳前後です。20か21ぐらいの学生ですが、必ずしも岡崎という街に固定したイメージを持っているわけではないものですから、かなり自由に作成させたということです。そして選考する時に、ある程度岡崎のアイデンティティというか、まあ岡崎城を中心にしたイメージのあるものを選んだという経緯があります。ですから少しずつ岡崎のイメージ作りを我々の方もお手伝い出来るような形でやりたいということで進めております。それぞれ学生が一応一年間を通してそれぞれのテーマでやっているものですから、それぞれの学生の個性というか、特徴が出て非常に作品としては面白い作品が出来たのではないかなと自負しています。ただこれは染め物ですから、4色までという色数が制限されているものですから、その中でデザインしたという制約があります。ということで一応フラッグに関しては商店街の方達と一緒に今やっております。今後は岡崎市の街並みに関してとりあえずフラッグという形では大学では関わっているん



ですけれども、本当はもう少し違う形でも関われる機会があればどんどん関わっていき
たいと思っています。

3. 「岡崎市果樹振興会」ブドウ加工品のデザイン協力

その次にですね、岡崎市果樹振興会からですね、葡萄の加工品のデザイン協力ということの依頼がござい
まして、本学の学生にこれもですね、事業に関わって
いろんなラベルデザインを作らせました。この作った
ものが現在販売されています。「巨峰のしずく」と書いてある一番縦長の物が、スイートソースです。まあち



ょっと少しジャムを柔らかくしたもののなんですけれども。これを使った新しいレシピの
提案なんかも他の大学なんかで料理研究ということでやってみえるみたいです。

ワインとジャムについても巨峰とデラウェアのそれぞれ2種類、ですから5案ずつを
これも3年生の学生全員に作らせました。その結果こ
れが採用されて現在販売されているものです。このワ
インが白と赤のワインですけれども、千姫と元康とい
うことで、学生がデザインしたものです。ここに岡崎
らしさをどう出すかということで、千姫も元康も徳川
家康に関係のある名前なんですが、千姫は元々ですね、
ずっと同じネーミングで販売されていたもののなんです
けれども。もう一回「Re」デザインというか、改めて
もう一度大学として作り直そうということで関わった
学生が25名ぐらいでしょうか。これも岡崎の花である
藤をあしらったんですね。実際は徳川家康を使ったよ
うなものであるとか非常に時代的なイメージの強いも



のも色々あったんですけれども、最終的にワインとしてのすっきりしたイメージ、まあ
日本酒ではないものですから、その辺の文字のイメージとそれからラベル面のイメージ
をあんまりこてこてしなくて岡崎のイメージがなお残るものということで、この作品が
選ばれました。それから元康の方もですね、本来竹千代というネーミングで私としては
考えていたんですけれども、これも岡崎のハクセキレイです。岡崎の鳥ということでハ
クセキレイを使って元康という名前で作りました。竹千代というのは既に商標登録がし
てあって使えないということがありまして、結果的にはこういう形になりました。これ
も岡崎のイメージを全体としては配慮したものが最終的に選ばれたということになり
ました。あとでまた、これに関わるポスターなんかも実は作ってですね、今現在このワ
インも販売されていますけれども、販売の為のポスターも学生に作らせました。それが
今現在使われて、JA の関係のある店舗とかですね、そういうところにも貼ってあり、
それから葡萄園なんかにも現在貼ってあると思います。また後でお見せしたいと思いま
す。

4. 「岡崎城」を中心とした街づくりについての提案

その次に、岡崎市を中心にした街づくりについての提案ということで、私の個人的な思いでお話したいと思います。僕も実は育ったのは岡崎なんです。生まれは東京ですけども、ずっと岡崎にいて、やはり岡崎のアイデンティティは、根本は岡崎城というか、家康を中心にした歴史的な街というイメージが非常に強いんですね。ですからこれを核にした街づくりをしないとダメですね。非常に岡崎の街っていうより、岡崎城周辺の岡崎公園だけが何か孤立してですね、それが全然街並みに反映されていないっていうのをすごく強く感じるんですね。

そういう意味でこの講演をするにあたって、岡崎城の周辺を見て廻ったんですが、殆ど街並みが残っていないですね。本来、城下町としての街並みがもう少し残っているのかなと思ったんですけども、板屋町の方もずっと廻って見たんですけども、所々木造家屋があるんですけど、殆ど残ってないんですね。これは非常にもったいないし、将来の岡崎の街づくりに関しても、もっと周辺地域で岡崎らしさが残る街をつくっていかない限り岡崎のアイデンティティを確立することはできません。特にこの周辺を朝もちょっと早めに来たもんですから喫茶店を探しても殆ど喫茶店がなくて、空き地がすごく増えているんですね。そうするとそこへどんどんマンションが建っていく。それから街並みとしての、何というんでしょうね、人の界限というか、賑わいが残るような街並みになってないから、どんどん閑散としていくというふうにすごく強く感じました。やはり意識的に岡崎城を中心にした街づくりをこの周辺につくるべきではないかなとすごく感じるんですね。

実は 4~5 年前に掛川に行ったんですね。本当はその資料を今日お見せすると良かったんですが、ちょっと資料が間に合わなかったんですが、掛川城再建にあたって、掛川は周辺の街並みを全部木造家屋にしたんですね。銀行でも全部木造になっていて中に入ると木造の受付があって、本当に店員が和服でも着ていたら江戸時代に戻ったかなと思うような街づくりになっているんですね。そういうふうに行政が一緒になって街づくりをしないとどんどん街は変わっていく。まあこれは岡崎の北側から撮った写真なんですけれども、ここに特に一号線で分断されていることによって、街がちっとも賑わいが伝わって来ないというか、岡崎公園と松坂屋、この辺の商店街と繋がりが一切ないんですね。その辺を見ますと本来歩道橋も、非常に昔からの歩道橋なんですけれども、この歩道橋を使って、この上をもっと楽しいというか、人が行き交ってもそれなりの楽しみが出来るような、公園の延長線上で歩道橋が出来て、それが康生の方に繋がっていくと、この辺が“ がらっと ”一変するんじゃないかなと思うんですね。今空き地を全部不動産屋がマンションなんか造っているという状況ですから、なかなか江戸時代の街並みをつくるのは難しいのかもしれないんですけども、この歩道橋一つを単なる人が通るだけの機能的なものだけじゃなくて、今東京なんかでも非常にこういう歩道橋なんかも新しいものがいっぱい出来ているんですね。それがひとつの公園にはならないんですけども、ある程度そういう街並みの延長線上でですね、界限として楽しめるような街づくりが出来るんじゃないかなと思うんですね。これ今、門が出来ていますが、ここも道路を挟んで分離しちゃっていますが、この門から入ると多少岡崎城の名残が残っていると思うんですけども、そういう街づくりが本当はされるべきではないかなという

気がしますね。これも歩道橋から見た景観ですけれども、公園の敷地内は街づくりとしてというより施設としては良いんですけれども、それが全然繋がっていないという気がすごしました。この一号線の景観が非常に街並みを分断していて、岡崎市に少しも何か賑わいの雰囲気がないというのがやっぱり問題だなという気がします。ひとつは僕がデザイナーとして考えると、この街並みもそうなんですけれども、ひとつは岡崎ブランド、今はそういうものが商工会議所を中心にですね、優良商品の推奨の為の優良シールみたいなのを作ってですね、地産地消の奨励をして、これのデザイン僕も関わって、このシールも作りましたけれども、やはり岡崎ブランドを作ることとですね。それから岡崎の街並みの整備というか、もう少しこう岡崎城を中心にした街並みづくりみたいなものを連動していくと、岡崎のイメージとしての核が出来て、岡崎らしさが出るんじゃないかなと思うんですね。ひとつは JR の岡崎駅の周辺が非常に近代化された再開発されていると思うんですけれども、これはひとつの街としてですね、当然近代化は必要ですからそれはそれであると思うんですけれども、もうひとつは岡崎城を中心にした街づくりみたいなのがですね、将来計画としてまあ 20 年から 50 年ぐらい先かなと思うんですけれども考えられると良いかなと思います。

先ほどお話ししたですね掛川、松本、小布施、高山、古川を、5~6 年前にずっと見て廻ったんですけれども、掛川は掛川城の再建にあたって、その周辺地区をずっとこうまあ江戸時代の街並みのようなものをずっとつくっているんですけれども、松本も同じように松本城を中心にして蔵造りというか、蔵を中心にした街づくりをやっていますね。これ再開発なんですけれども、その蔵の形をした店舗であったり、いろんなそういう施設もそうですけれども、そういうものをずっとこう松本城の周辺っていっても全部ではないんですけれども、ひとつの方向に対して再開発をずっと進めています。小布施というのは長野ですけれども、長野のこれもかなり有名なところでして、葛飾北斎を中心とした北斎美術館がありまして、その周辺とですね、それから栗を中心にした店舗というか古い菓子屋さんがあるんですけれども、そこが文化の拠点としての施設づくりをしているんですね。ですからそういう形では殆ど木造の街並みを残して、例えば郵便局であるとか銀行も全て木造家屋で造ってあるんですね。その辺が非常に特徴的な街で、かなり全国から観光バスが来てですね非常に賑わっているということがあります。それから高山、古川もですね、高山はこずっと 30 年ぐらい前から高山へ行ってますけれども、もちろん観光施設が市の財源としても大きな役割を果たしているということはあると思うんですけれども、かなり規制があるんですね。僕もたまたま今岡崎市の屋外広告の審議会というところで委員として務めていますけれども、例えば看板ひとつにしてもですね高山の場合は木製の看板でないと許可されないんですね。色も殆ど黒・白・グリーン・茶色ぐらいしかほとんど認められてない。これは市の条例なんですけれども、かなり規制をしない限りどんどん野放しになってどんどん崩れてくるんですね。これは古川でも同じことがありまして、古川町も高山の隣ですけれども街並みが非常に綺麗なんですね。これも同じように、街並みを保存する為に行政がかなり支援をして、建物に対しても景観賞を出したり、それから木造家屋の建物に対して補助金を出すとか、そういう政策をかなりされているんですね。そういうことでいうと岡崎市もそういう景観条例そのものももう少し岡崎市の歴史を継承するような規制をかけないと、このままだとど

んどん岡崎の街のアイデンティティがなくなってくるという気がして、私自身地元で育ったということもありまして、危機感を感じております。一応岡崎そのものに関しては岡崎というか街並みに関しては機会があればいろんな周辺地区の街並みの写真なんかかなり資料としてはたくさん持っているものですから、そういうものを中心にお話する機会があれば是非またお話をしたいなというふうに思っています。

あとですね、急いで話を進めてしまいましたけれども、大学としては、今岡崎市とどういうふうに産学共同でコラボレーションが出来るかということを今少しずつ考えて進めています。先ほどお見せした岡崎未来城下町連合とのフラッグに関しては、授業の中で3〜4年は続けたいというふうに大学としては考えています。それとあとは岡崎のアイデンティティをどういうふうに結びつけるかという辺りを、これから学生を指導しながらやりたいということです。それからJAとの関係や、地元の果樹振興会との関係で言いますと、たまたまワインラベルとジャムのラベルを新しく作り直したいということと、それから若い学生のアイデアを反映させたいという意向があったものですからお手伝いしたんですけれども、私自身、ずっと10年ぐらい愛知県のデザイン指導というか、JAに関わる「道の駅」だとかですね、その施設に関わるデザイン指導、サイン計画も引くめて販売店の指導なんかもやっているものですから、もう少し岡崎市のJAだとか、まあ果樹振興会もそうなんですけれども、もう少し関わっているいろんなことが出来るのではないかなというふうに思っています。また、岡崎の地場産業といえば「石」であるとかですね、いろんなことも大学としてはそういうものにも関わって、新しい新製品開発というかですね、今後関わっていく必要があるのではないかなというふうに思います。例えば石屋さんとの話し合いの機会もつくり、これから大学としてどういうふうに関わっていくかということも検討中です。岡崎の御影石を使った、新しいイベントをもっとつくっていく必要があるのではないかなという気がするんですね。茨城の同じように石を生産している地域では、全国のデザイナーだとかですね、そういう人達に石のモニュメントだとか、彫刻を作ったものを街並みにコンテストという形でですね作品を作ったものを街並みに並べたりなんかしています。ですから岡崎もですね、そういう国際的なコンクールをやるなり、国内のコンクールをやってですね、そういう石像みたいなものをもっとこう岡崎の街の中に作っていくことも出来るのではないかなというふうに思います。たまたま富山ですね砺波市というところがあります。富山市は、砺波はですね欄間で有名なんですけれども、ここは欄間を作るという伝統的な技術を活かしてですね国際的な彫刻展というか、木彫のコンクールをやっています。これは世界の彫刻家に依頼をしてですね、そこに一ヶ月宿泊して、その間に作品を作る。作ったものを街の中に展示するんですね。それで賞を出したり、滞在期間の費用だとか、そういうものを全部街が負担してですね、そういうことを。同じように岡崎も新しく新製品開発というか、たとえば石屋さんを中心にしたところも、もっとダイナミックな計画をされると、岡崎の特徴が出るのではないかなというふうに思います。まあこれは大学としてどこまでお手伝い出来るかってのはまだ分からないんですけれども、そういう意味では大学はこれから行政と一緒に街おこしというか、街づくり、それから産業おこしみたいなものもお手伝い出来るといいのではないかなというふうに考えております。

かなり早めに喋ってしまいましたけれども、今ちょうど岡崎城をずっと回った時にですね、ちょうど岡崎公園の裏側をちょっと歩いてみたんですけれども、例えば今この街並みというか、この周辺は民家が多いんですけれども、もう少しこう江戸時代の雰囲気を残すような城下町風の雰囲気にするとはとりあえず可能ではないかなというふうに思いました。もちろん従来住んでみえる方もたくさんおみえですし、こういうところをひとつの街並みを全部整備するのは大変なことだと思うんですけれども、一番何か出来そうな可能性はあるなというふうに私自身が勝手に思ったんです。ちょうどその裏側、隣がグランドみたいになっているんですけれども、例えばグランドなんかをもうちょっと活かす方法を考えるとかですね、それからこの周辺を少し雰囲気のあるというか情緒のある街並みにすることだけでもですね、とりあえず岡崎城だけが孤立しているという感じではなくって、もうちょっと繋げるような形に出来るんじゃないかなというふうにたまたま歸りに目に付いたものですからそういうふうに感じました。ちょっと早口で喋っちゃったものですから、私の方のお話をしたいことは大体以上です。